

三重大学合気道部名誉顧問のお言葉

稽古所感

勤務先で、ごくごく内うちにですが、小規模の入門者用講座を始めました。「桂坂合気道同好会」といった名称です。還暦をすぎて、老耄状態でのお稽古の再開ですが、昨年までご指導いただいた竹田明敬先生の薫陶もあり、いろいろなことが新たに増えてきました。

一教の初歩のことは、昨年、一昨年とこの欄でも書きましたので、割愛します。

二教について。ようやく手首をつかまれた瞬間には、すでに二教がかかっているという状態をなんとか教えることができるようになりました。相手をつかんだ手首を引っ張る場合、動かない場合、捻ろうとする場合など、いろいろな動きが想定できますが、そのどれに対しても対応できる稽古は必要ですね。相手が自分より上背がある場合、相手の中心線とつかんで来た腕の側の肩の間あたりの「ある方向」に向けて、座り技の場合と同様の角度でこちらの指を向けると、そのまま二教が働き、これで相手の腕と体を制御できます。

自分でそれを体得して、改めて植芝盛平の晩年の実写映像などみると、これが自然にできています。塩田剛三の演武などでも、体格の大きな弟子相手に、塩田先生がこれを上手に活用していることが、確認できます。ただ、この手の角度や間合いは、実地にひとりひとりと対峙しないと、体得は困難ですね。各自の体格に自ずと合わせなければ、無意味なので。

この半年は、逆半身の片手手取りに稽古を限定し、相互の体勢を見極めながら、どこで技が分岐し発展するかを、少し体系的に追ってみました。意識して順列組み合わせを尽くし、それぞれの間合い、体の捌きと、発する瞬間を見極めたうえで、それらを身体の無意識へと沈めてゆく。やがてこうして身体化された知は、条件に応じて自ずと発揮されるようになる。これは、最近哲学で流行の用語を用いるなら、能動態でも受動態でもなく、印欧語族ではその区別よりも古層に属する中動態と比喩できるようなもの。相互の関わりが結果的には必然となって現れる行為の探求、その「かたち」を体得するのが稽古の時間といえそうです。

いずれにせよ、ある段階あるいは水準からは、こちらが意図した技を掛けようとか、特定の技に持ち込もうとする意識そのものを捨てる必要があります。意図的に「消そう」としては、その意志が見破られる、あるいはそこにつけ込まれるので、「無意識になる努力」という矛盾した稽古が必要ですが、型稽古の反復には、そうした教訓も含まれているはず。逆に、だからこそ盲目的に模倣したり、ひたすら先生の技を惰性で反復したりするだけでは、上達は望めない。なぜ自分にはできないのか、という反省の積み重ねは不可欠でしょう。

相手のなすがままに任せるところから、いかなる動きが生まれるか。それを愉しむ境地。還暦を過ぎ、自らの進境？に驚きつつ、一瞬・一瞬の充実を体現する稽古を堪能しています。

三重大学人文学元助教授・合気道部・元顧問

国際日本文化研究センター・総合研究大学院大学教授・放送大学客員教授

稲賀繁美